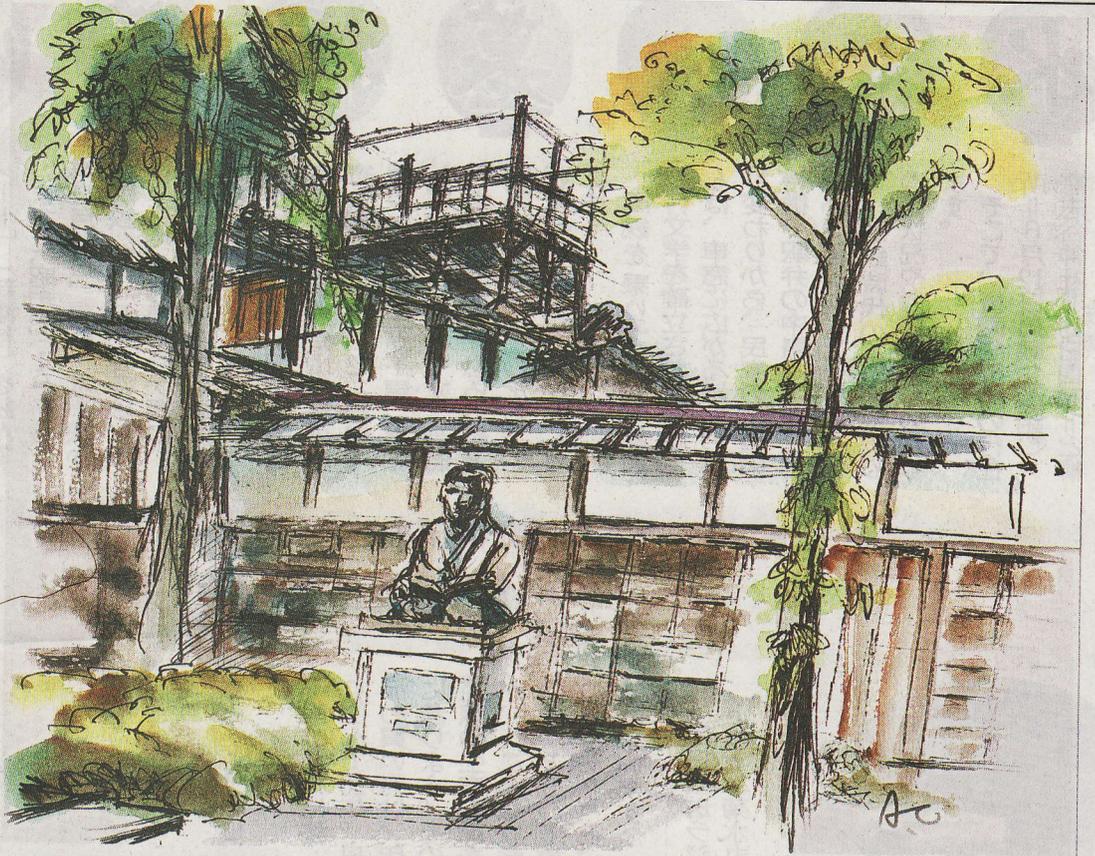


大阪の誇り「適塾」を起点にして



御堂筋のからり

酒を飲んだ。自分の昇格を自分で祝っているつもりであった」とあり、彼の孤高ぶりがうかがえる。今、隣の公園から、物干し台に思いをはせながらスケッチをしている。一見秀才タイプの彼が、蘭学で医学を学びながらも兵学、造船、新政府総司令官、軍制改革の分野で指導的立場に立ったのは興味深い。学問のため

適塾は天保9(1838)年、緒方洪庵が開塾した蘭学塾である。彼の人生哲学「自分の心に適するものを適として楽しむ」の意味の「適々」にちなんで、適塾と呼ぶ。当時、儒教精神が絶対視されていたので、画期的な発想だと思ふ。医者としての心構えは「扶氏医戒之略」第2条にて「病者に対して唯、病者を診るべし。貴賤貧富を顧みることなかれ。一握の黄金を以て、貧士双眼の感涙に比するに、その心を得るところ如何ぞや。深くこれと思うべし」と述べている。彼の人間愛に満ちた医学への思いである。この思いは門下生の福沢諭吉に「天は人の上に人をつくらず」の言葉を語りしめ、江戸に

阪大など3医学部のルーツ

洋学塾を開かせた。門下生ではもう一人、大村益次郎に注目した。司馬遼太郎の「花神」で主人公、村田蔵六として描かれている。上巻にも多くの文中に、「適塾ではある夏、輪講の成績がよく、第一級生になった。塾頭や塾生に注目されても彼らとあまり交わらず、独り緒方家の物干し台に上って、豆腐の皿をひざもとに引きつけて

の学問でなく、開国、西洋化の日本の近未来を予測して、それに必要な学問を究め、必ず形にする実行力がすごいと思う。この力は洪庵の教育方針「自由な発想」「平等」「幅広く学ぶ」から醸成されたものと思われる。医師としての洪庵で注目したいのが、天然痘の予防接種活動のために、除痘館を嘉永2(1849)年に開設したことであると、1階の食卓とかまどをみて気付かされた。



船場の町人たちは家業の傍ら、自由な姿勢で学問と教育には積極的に取り組んできた。その真骨頂が私塾への支援だと思

う。主な私塾として、適塾、懐徳堂、梅花社、泊園書院などがあるが、中特別展「適塾から大阪医学校へ」が開催中で、非常に身近に感じ取れた。

絵・文 熱田親憲